



特集 変革期のアジアと宗教

スリランカの民族紛争

—その宗教的位相

1 はじめに — ふたつの種

【マツリの種】(監督サントーシュ・シヴァン、一九九八年インド制作)という映画がある。これはスリランカの少数民族タミルの独立を目的に組織された武装集団「タミル・イーラム解放の虎」(Tamil Eelam Liberation Tigers: LTTE)の女性メンバーによるインドの元首相ラジーヴ・ガンデー暗殺にヒントを得て作られた映画である。主人公は自爆テロによる政治家の暗殺命令を受ける。しかし、彼女は身ごもっていた。このため、彼女は最後の最後で爆死することをやめる。この女性兵士は、みずからの体に宿った種(胎児)の未来を思い、命

令に従わず、この種と生きることを選ぶ。

これはフィクションであるが、兵士にそのような躊躇、迷いが生じる瞬間は存在するのだろうか。興味深いことに、LTTEにも種をめぐる思想が存在することである。後述するように、LTTEは一九八九年にきわめて組織だった埋葬方法や追悼式を創出した。もちろん、それはまったく無から生まれたわけではない。シヴァ派のヒンドゥー教、民衆ヒンドゥー教、キリスト教などの影響を無視することはできない。すくなくともヒンドゥー教徒は火葬が一般的であるが、LTTEの兵士たちの遺体は火葬されることなく埋葬される。なぜ埋葬なのか。その理由として、かれらはタミルの国(イーラム)の種にな

たなか まさかず

田中雅一

るといふ考え方が紹介されている [Shank 一九九七]。

死者たちは種となつて国の繁栄に貢献する、あるいは再生して貢献につくすのである。ここでは、種は個別というよりは、集合的かつ匿名的である。死者の個性は土に戻ることで解体され、種となつてタミル社会の未来を支える。L T T Eの信念においては、種となつた遺体は、自身の身体を否定するところに眞の再生が存在する⁽¹⁾。これにたいし、映画で描かれているマツリの種は、集合的な未来への希望を否定し、みずからの身体力(再生産する力)を信じ、生きようとす。どちらの場合も、そこに「犠牲」の観念が色濃く認められるが、両者の「種」をめぐる相違も大きい。わたしたちは、なにも戦争や「自爆テロ」という極限状況だけでなく、程度の差はあれさまざまな領域でこうした二種類の犠牲の選択に迫られているのではないか。以下の考察では、犠牲をめぐる問題意識を念頭に置きながら、スリランカの民族紛争において宗教が占める位置について考えていきたい。

具体的には、二つのテーマを取り上げる。ひとつは、イスラーム教徒たちの動向である。もうひとつは、L T

T Eの宗教性である。

スリランカの多数派は仏教徒のシンハラ人である。これにたいし、少数派のタミル人は非仏教徒であり、そのなかでヒンドゥー教徒が多くを占める。したがって、スリランカの民族紛争は、多数派の仏教徒と少数派のヒンドゥー教徒という対立図式で理解される傾向にある。しかし、独立運動を支持するタミル人のなかでキリスト教徒たちの役割も無視することはできない。とはいへ、シンハラ人の間にも少数ながらキリスト教徒がいるし、タミル人キリスト教がすべて独立を支持しているわけではない。同じように、ヒンドゥー教徒の場合も、居住地によつて独立への思いには差が見られる。すべてのヒンドゥー教徒が独立を良し、としているわけではないのである。さらに、同じタミル語を母語としつつも、タミル人とみなされていることを拒否しているイスラーム教徒はこうした独立運動に関わっていない⁽²⁾。この場合、宗教が、ほかの集団と区別する重要な役割を果たしていると言えよう。

一九八〇年代から活発になるタミル人による武装独立

運動は、均質な宗教信者から成り立っていないことや、マルクス主義的思想を掲げる集団がいたりしたこともあり、その性格はきわめて世俗的だとみなされてきた。これにたいし、多数派のシンハラ・ナシヨナリズムは、仏教との関係を無視するわけにはいかない⁽³⁾。しかし、宗教を既存の宗教組織や教義(キリスト教やヒンドゥー教)に限定して考える必要はない。宗教を、より抽象的な視点から見た場合、たとえば生と再生をめぐる信念、死者への追悼・祈念の存在などに宗教性を認めることが可能であるからだ。この点を念頭に、本稿ではL T T Eの宗教実践を考察したい。つまり、本稿ではスリランカの民族紛争を事例に二種類の宗教実践を取り上げることになる。

ひとつは、既存の社会・宗教的な境界を強化し、内には統合を、外には改宗や排除を求める宗教実践、ひとつは既存の宗教を横断する宗教実践である。本稿では、前者を境界強化・境界拡張型の宗教、後者を境界横断型の宗教と呼ぶことにする。スリランカにおいては前者の典型は仏教やイスラームかもしれないが、こうした分類はあくまで文脈依存的なものであつて、スリランカの仏教や

イスラームがつねに、そしてすべての実践において境界強化型とは言えないことをこゝわつておきたい。

2 シンハラ・ナシヨナリズムの展開

スリランカ(セイロン)の面積はおよそ六万五五〇〇平方キロで北海道の約八割に当る。すこし古いが、民族紛争が激化する以前になされた一九八二年の統計にもとづいて紹介すると、総人口は一四八五万人で、そのうちシンハラ語を母語とするシンハラ人が全人口の四分の三弱(七二%)を占める。つぎにタミル語を母語とするタミル人が二五%、ほかに英語が母語という人びとも少数だが住んでいる。シンハラ人の多くが仏教徒だが、キリスト教徒も少数いる。仏教徒はおよそ一〇三〇万人で、全体の七〇%を占める。タミル人のほうはヒンドゥー教徒が多数を占めるが、イスラーム教徒やキリスト教徒も少なくない。

タミル人のうちの三分の一はインド・タミルと呼ばれ、一九世紀に南インドのタミルナドゥ州から送られ、住みついた労働者たちの子孫である。主に中央の高地に